

苦竹

次の一節は右枝は太く、左枝は細し、毎節相互にかくの如くして梢上に至る、其雙枝よりまた小枝を生じ、小枝よりまた細枝を分ちて、其梢ことにをのく葉をつゝ、其葉長さ二三寸廣さ二分許にて、其先に葉相對し、三葉は其下につきて、すべて五葉を一朶とす、又三葉のもの、及び二葉相對して其葉細小なるものありといへども、それは全く年を経て下葉のおのれと枯落しにて、必ずその性質にはあらず、またはちくの本竿節は、ま竹より低といへども、枝節は却てま竹よりも高く、其狀頗る鶴膝の如し、扱其枝を生ずるかたは、左にても右にても、節上より竹身に細長なる一道の凹處ありて、枝を生せざるかたは全く正丹なり、また其竹身すべて白粉を帶るといへ、共に下節の本の周圍は、純白なる事、恰も一分許に截し白紙を別に貼せしが如し、或人曰、舊より相模國小田原に大竹とよぶものあり、即淡竹にして、其竿高さ三四丈、圍み八九寸にして、先こけす、故に幟竿旗竿の用には、必ずこれを供する也、今は此竹林大久保加賀守御預りにて、漫に採る事を禁ずるを以て、土人或はおとめ竹ともいふといへり、○下

〔多識編三〕苦竹、和名仁加太計、今按末太計。

〔和爾雅七〕草木、苦竹、考案或作苦竹

〔東雅十六〕竹タケ略○中、苦竹は○中、古にカハタケといひ、即今俗にマタケといふ是也。

〔倭訓案中編二十四〕まだけ、真竹の義、苦竹をいへり、

〔大和本草九〕苦竹、國俗吳竹ト云、又真竹ト云、筍ノ味微苦、ハチクニヲトレリ、筍生ズル事ヲシ、其大ナル者周尺餘、其籜紫白色斑文アリ、用テ笠トシ履ノ緒トス、其外用多シ、

〔和漢三才圖會八十五〕竹略○中

苦竹、真籜竹、和名加波多計本朝式爲河竹、其筍紫斑味苦辛、其竹色青節間不促、大者周一尺六寸、長六七丈、